

2021. 6. 8 (火)

「もうひとりのわたし」との出会い

阿 部 潔

何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある。

(箴言 4章 23節)

みなさん、こんにちは。社会学部教員の阿部です。ここで話すのは何年振りでしょうか。なんと経験しても、この場所、チャペルという religious space で話すことは、わたしにとって、まるで「もうひとりの自分」と出会うかのような独特の緊張感と、それと同時にほかでは得られない喜びに満ちた掛け替えのない時間です。

ニューノーマルの到来？

今日は共通テーマ「日常と非日常」をめぐって、わたしの考えることをお話ししたいと思います。

現在、わたしたちの多くにとって「非日常」を意識し感じる機会は少なくありません。その理由は、あらためて言うまでもなく2020年を迎えて以降今日に至るまで全世界を覆い尽くしている Covid-19 が、それまでの「日常」を大きく変えてしまったからです。新型コロナウイルスは文字通り「非日常」として、人びとの前に突如として現れました。「三密を避ける」や「ソーシャル・ディスタンシング」などの感染対策をはじめと

して、これまで当たり前に行なっていた日々の生活に新たな制約や制限を余儀なく課された当初、さまざまなところで本来はビジネス用語である「ニューノーマル＝新しい生活様式」について議論が交わされていました。ですが、今、あまりその言葉を耳にしません。その理由は「ポストコロナ」あるいは「ウィズコロナ」という新しい日常のあり方がすでに根付いたからなのでしょうか。それとも、いまだにわたしたちは心から落ち着いて、安心して日々を過ごせるような日常を取り戻せていないからなのでしょうか。正直、わたしにはどちらなのかよくわかりません。

ただ、ひとつ確実に言えるのは、容易に予想されたことではあれ長引くコロナ禍のもとで、多くの人びとががかったような、これまでどおりの「日常」が戻ってくることを切に願っているという事実です。ごく当たり前に人と会い、親しい者同士で気兼ねなく体を寄せ合い、マスクの有無を気にすることなく楽しく過ごせる日々。そんな当たり前の「日常」を取り戻すことを、わたしたちは心から願っている。日々の困難に耐えながら、その日が訪れることを辛抱強く待ち望んでいる。

ですが、少し残酷な言い方かもしれませんが、それはおそらく無理な注文です。なぜなら、今回のコロナ禍という未曾有の危機を経験した後に訪れる時代では、以前とは異なる社会のあり方を構想し、それを実現することがわたしたちが直面する課題にほかならないからです。ただ単に「かつての日常」に戻ることなど、現実にはありえない。いま現在わたしたちが、そうした時代の大きな転換期に遭遇していることは、日々社会学部を学んでいるみなさんにはあらためて言うまでもないことでしょう。

コロナ禍での「苦い経験」

これまでコロナ禍という非日常を強いられる中で、ときとしてわたしたちは大きく動揺したり、思わぬ行動に走ったりしてきました。この一年と数ヶ月の日々を振り返ると、いくつかの出来事が思い出されます。例えば、「トイレットペーパーやティシュペーパーがなくなる」との情報がまことしやかにSNSを駆け巡り、多くの人が買占めに走り、その結果、それらの商品が店頭から姿を消してしまった。緊急事態宣言のもとでだれもが「自粛」を強いられる中、自分たちだけルールに従わず店を開けたり、勝手に飲み食いして楽しんでいるようにはたからは見える輩たちに対して、大勢の人が匿名で罵詈雑言を浴びせかけた。暑い夏でもみんな我慢してマスクをしているのにそれをせずに街を歩いている「不届き者」を見つけては、「マスク警察」と呼ばれる連中が注意・指導という名のもとで嫌がらせを繰り返した。後から少し冷静になって考えれば、「どうしてそこまで」とか「そんなことをして、本当に意味がある

のか」と思わざるをえないような出来事が、その当時には平然と行われ、場合によっては少なからぬ人たちの共感や支持を得ていた。そうした「苦い経験」を、わたしたちは忘れるべきではないでしょう。

知恵と技を身につけるチャンス

では、なぜ「非日常」の日々のもとでそうした事件や現象は起きたのでしょうか。すでに社会心理学や集団力学などの研究分野では色々と議論がなされていることでしょう。ここでは、そうした学問的な話というよりも、当たり前の日常を生きるひとりのヒトとして、わたしたちにできることを考えてみたいと思います。

今になって考えれば「なんであんなことをしたんだろう」と反省したり後悔する経験は、一連のコロナ禍での日々を振り返ったとき、だれであれ多少なりともあるのではないのでしょうか。だとすれば、「後から」ではなく「そのとき」に、そうした考えや判断ができるようになれば、今回のような「苦い経験」を再び繰り返す過ちは避けられるかもしれません。つまり、経験したことのない危機という非日常の真っ只中でも、少しだけ冷静に自分と周囲を見つめ直すことができれば、今後、必要のない買占めに走ったり、罪なき人を攻撃するのではなく、直面している危機に本来の意味でより適切に対処できるようになるかもしれません。

ここで重要なことは、長引くコロナ禍という現在の状況は、たしかに日々を送るうえでどことなく息苦しく、辛いことも多いのですが、非日常に対処する知恵を身につけるうえで格好のチャンスだということです。なぜな

ら、どのようなかたちであれ「日常が戻ってきた」と感じられたとき、きっとわたしたちの多くは危機の最中で経験したことや、そこで犯した自らの失敗をきれいさっぱり忘れてしまっているだろうからです。長引く、終わりの見えないコロナ禍に見舞われている今この時にこそ、来るべき時代に求められる知恵と技を身につけることが求められているのではないのでしょうか。

「わたし」と向き合う

では、具体的にどうすれば良いのか。もちろん、わたしには「正解」はわからないし、みなさんに指南すべき処方箋など持ち合わせていません。ただひとつだけ言えることは、どんなに苦しく厳しい状況のもとでも、自分自身にきちんと向き合う術（すべ）を日頃から身につけておくことは、危機に満ちた非日常を乗り越え、その先により心安らかな日常を築き上げるうえで決して無駄にならないということです。まわりの人が騒ぎ立てることに惑わされたり、SNS など便利なデジタルデバイスに駆り立てられるのではなく、本来の意味で「自分で」考え、判断を下すこと。そうした技を習得するためには、例えば「文学」をじっくり読んだり、「映画」をじっくり味わったり、「音楽」に静かに耳を傾けることを通じて、日頃はどちらかといえば寡黙かもしれない自分の中の「もうひとりのわたし」と出会い、そんな「わたし」としっかり対話を重ねてみる。するときっと、ほかのだけれどもない「わたし自身」が歩んできた人生の意義と価値、そのかけがえのなさを感じ取ることができるでしょう。そのようにして、他人からの評価や評判、今の時代であれ

ば SNS での「承認」や「いいね！」などによって測られるのではない、本当の意味で「わたし」をしっかりとあなたたち自身が実感し体感できれば、たとえ危機に満ちた非日常のもとであっても、不安や不信にいたすらに突き動かされることなく粛々と日々を送ることができるはずです。その意味で、日頃から「日常」をしっかりと生きることこそがなによりも大切なのであり、それは実はとても難しいことなのかもしれません。

「心を守る」ために

ここまでの話を踏まえて、先ほど紹介された聖句での「自分の心を守れ」の意味を、あらためて噛み締めたく思います。自らの財産や身体ではなく「心を守れ」との聖書での呼びかけは、未曾有の危機に見舞われ、ともするとだれもが「非日常」の動きに振り回されがちな今の時代において、ひとりひとりが向かうべき道、そしてわたしたちみんなが力を合わせて築くべき社会の姿を、しっかりと示してくれているのではないのでしょうか。

打樋先生の導きのもとでなされる学部チャペルアワーをはじめとして、関学でのキリスト教主義と人権思想に根ざしたさまざまな活動は、自分と向き合うことを通して「もうひとりのわたし」と出会えうえでのさまざまなキッカケを与えてくれることでしょう。どうかみなさんには、困難や危機に見舞われた非日常のもとでも決して大きくブレることのない「わたし」を学生生活を通して育むうえでも、そうした機会を是非とも有効に活用してもらいたいと切に願います。

(社会学部教授)